



赤井 益久  
國學院大學 学長

あかいますひさ氏

1950年生まれ  
1976年 早稲田大学第二文学部東洋文化専修卒業  
1978年 國學院大學大学院文学研究科博士課程前期修了  
1983年 國學院大學大学院文学研究科博士課程後期満期退学  
1985年 國學院大學文学部専任講師  
1988年 國學院大學文学部助教授  
1996年 國學院大學文学部教授  
2001年 國學院大學教務部長 学校法人國學院大學評議員  
2007年 國學院大學副学長 学校法人國學院大學理事  
2011年4月1日より現職

独立法人大学評価・学位授与機構認証評価専門委員(～2011年3月)  
中国古典学会理事、日本中国学会理事。文学博士。

## 國學院ブランドの確立と強化を目指して

現在、私達は、激しいグローバル化のうねりの中にいます。しかし、グローバル化という点で、わが国に最大の波が押し寄せた時代はいつかといえば、明治維新をおいてほかにありません。

当時、近代国家を目指し、欧米諸国の思想、文化、体制の導入を急ぐあまり、日本文化をないがしろにする風潮が興りました。一方で、わが国が独立した国家として発展していくには、欧風の単なる模倣ではなく、自国の歴史・民族性に基づくものでなければならないという気運も興り、そうした気運を背景として、1882年(明治15年)、「皇典講究所」が創立。日本の古典を研究するこの研究機関が、本学の母体です。後に1920年の大学令により、日本初の私立大学のひとつとして、國學院大學は開学いたしました。

### グローバルな時代だからこそその「日本を学ぶ」

國學院とは、「国学」の院ということであって、「国」の学院という意味合いではありません。「国学」というものを端的に申し上げるならば、「日本人の、日本人による、日本を研究する学問」といえましょう。従って本学は、学問分野を大学名に冠した、数少ない大学ということができます。

本学は、神道精神を研究・教育の理念としています。神道精神の本質とは、「日本人としての主体性を保持した寛容性と謙虚さ」です。これが日本人本来の心性であり、心ばえであると思われませんが、昨今、急激にグローバル化が進展する中で、この精神が無自覚になってはいないだろうか？ 本学にはそのような問題意識があります。併せて、本学の教育の特色をいっそう鮮明に打ち出すため、「日本文化体験型授業」を2年前より設置しました。それは、教養総合科目の中に展開する「國學院科目」という科目群で、「日本の基層文化」「國學院の学問」「和の心・技・体」「ことのはの文化」という4科目で構成されています。これらの中での和室の立ち

居振る舞いや、わが国で生まれた多様な伝統文化・芸能・言語表現を学生達は体験し、堪能しており、なかなか好評を博しております。また、従来より「神道科目」や「日本語科目」といった科目も設置しており、さらに、正課外の活動として、成人加冠式、観月祭といった伝統行事も行っています。このように、「日本を学ぶ」多種多様な機会を提供している点が、本学教育の最大の特長といえます。

本学は、文学部、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部という5学部を擁する「文科系総合大学」であり、学生約1万人という中堅規模の大学です。この規模だからこそそのメリットとして、学生は「横断的」な、または「総合的」な学修が可能です。幅広く学びたい学生は、124単位中、教養科目と専門科目の比率がほぼ半々でも学修可能なカリキュラムとなっているのです。本学より大規模な、学部数の多い大学では、こうした学びは難しいのではないのでしょうか。この点も、本学の特長だと考えています。

### 「時間軸」「空間軸」を身につけさせたい

2011年、学長に就任以来、私は「國學院ブランドの確立と強化」をひとつの目標としてきました。ブランド戦略というものの要諦を考える時、最大の効果をあげるものは、単なるイメージや広告宣伝といったものではなく、やはり「品質」そのものでしょう。大学にとって、それは「人材」。いかに優れた卒業生を輩出できるかが最大の課題と認識しています。

本学卒業生に対する企業側の見立てを総合しますと、まじめ、誠実、地味、根気強い…といったものが大半を占めます。神道精神の本質とは「寛容性と謙虚さ」だと申しあげましたが、卒業生の評価は、これらと相通じるものがあります。従って、本学の教育成果は、卒業生に確かに表れているともいえますが、私はこのままで良いとは考えていません。

日本人の立場から、現代の外交、政治、経済といった諸相を眺めるにつけ、今後いっそうグローバル化の進む社会に踏み出す卒業生達には、ぜひとも大学時代に「時間軸」「空間軸」という感覚を身につけてもらいたい。私は、そう切に願っています。即ち自分は今、いかなる時間軸・空間軸の、どの地点にいる人間なのかを直ちに認識できる力、また、それをもって自らをコントロールできる力を備えたい。その力の有無は、社会人として決定的な差となるようにも思うのです。その基礎を育むには、教養教育が鍵を握ります。そういった観点から教養教育を見直すことも検討しています。

本学は、長い歴史を振り返ったうえで、21世紀にさらなる発展をするべく、短中期計画として「21世紀研究教育計画」を策定しています。2002年に第1次計画、2007年に第2次計画、2012年に第3次計画を策定。

第3次計画では、第1次、第2次で定めた大学の使命と行動計画を架橋するものとして、次のような大学の将来像を追加しました。「建学の精神を活かした個性ある教育と研究の実現」「日本社会の中核を担い、グローバル化する時代に対応できる人材の育成」「國學院ブランドの確立と強化」。これにより、学内外において、本学の進むべき道筋が明確になりました。同時に、5年をめどとするPDCAサイクルの導入によって、計画の実効性が上がったように感じています。

計画遂行の中間地点に当たる2014年の見直しでは、「計画を実行するにあたっての指標の設定」「各基盤整備間の連携の強化」「計画の修訂版の公表」等を決定しました。そして実際に、2014年10月には「國學院大學21世紀研究教育計画(第3次)修訂版」を公表し、ホームページにアップしました。今後もこのようなかたちでわれわれの取り組みを公表し、関係者のいっそうの理解を得ながら、計画の実行に邁進する所存でおります。

RCU